

## 重度重複障害児教育研究

Preferred Education for Children with Multiple Handicaps

北 嶋 淳

### 目 次

人間一般からとらえる重度重複障害児の教育評価（2） .....	74
---------------------------------	----

## 人間一般からとらえる重度重複障害児の教育評価(2)

北嶋 淳

## 1. はじめに

前回は、平成17年度文科省指定研究の「肢体不自由教育における小中高の教育計画と評価」研究協力校として「自立活動を主として学習する児童生徒の教育的ニーズに応じた指導の実現を目指して」と題して行った当校研究協議会における発表をもとに、重度重複障害児の適切な教育評価はどのようにあるべきかを明らかにするために継続研究を行っていることを述べた。

その内容については、グループ研究を立ち上げた経緯、研究の目的、方法と内容、研究経過、今後の研究と方向にわけ報告した。

まず、前回は簡単に振り返っておきたい。

障害の重い子どもたちの教育評価は大変難しいと言われている。その理由は、子どもたちが負っている障害が重いため、その成長の変化が捉えにくいことから来ている、と一般には説明されることが多い。

そのようにいわれてみると、何となくそのように思われるものの、評価が難しい理由をあらためて問うてみると、そこにはいくつもの疑問が湧くことに気づく。

例えば、「障害が重い」というが、そもそも「障害とは何だろうか」、「重いとはどういうことなのだろうか」、あるいは、「成長の変化がとらえにくい」というが、「成長とはそもそも何で」、それがはかりにくいのは、子どもの側の問題なのか大人の側の問題なのか、さらにはまた、「評価が難しい」というが、そもそも評価に至る一連の過程である「実態把握」「目標設定」「指導方法」は適切なのか……等々、どれをとっても、これらの疑問にしっかりと解答が出せなければ、適切な評価はおぼつかないと思えてくるのである。

そこで、その評価の難しさに対して、これらの疑問に現象レベルで答えるのではなく、現象の意味するところを、「もともとそれはどのようなことなのか」という一般論を立て、構造に踏み込んで明らかにしつつ評価過程を検証できれば、より適切な評価に結びつくのではないかと仮説を立て、その実証に取り組んでいる。

前回はその活動を報告したところであった。

## 2. 講習会から学習会へ

前回述べたとおり、本グループの具体的な研究内容は

- (1) 学問的方法論の研究。
- (2) 「対象の構造に入った子どもの見方と指導の仕方」(桐が丘特別支援学校研究部主催講習会)における現職教員への講習。
- (3) 現職教員、看護研究者、障害児教育研究者との共同研究。

の3つの柱に依る。

そのうち、(2)の現職教員講習会の内容について、その組み立てを変更したのでそのことを少し報告しておきたい。

現職教員への講習会は、平成20年度で3回目となるが、講習会の内容について、その学習の継続深化を希望する参加者の声が大変強かった。そこで、平成19年度からは、講習会の継続学習として、秋と冬に集中学習会をおこなった。つまり、希望者には3回シリーズの形となったのである。

この3回の組み立ては以下のようなものである。

- 1) 講習会；構造に入って捉える対象理解と指導の仕方を一般的に知る
- 2) 学習会1；自分で捉え指導ができる実践方法を身につける
- 3) 学習会2；講習会、学習会の知識を使って、それぞれの現場で実際に行なった事例を持ち寄り、検討し合うことによって、実践で困っている問題を解決していくとともに「構造に入った対象理解と指導の仕方」をさらに深める。

1), 2), 3)を通して学習した場合は、「障害の重い子どもたちの理解と指導」の基礎が一応身につく形になると思われる。

その趣旨と内容を参加者へ配付した挨拶文から引用しつつ記す。

## 3. 講習会、学習会の内容

〔講習会〕平成19年8月16日、17日

趣旨；

「障害の重い子どもたちを目の前にし、何とか一般的なあり方に近づけようといろいろ試みてうまくいかないとき、困ったことを解決する具体的なマニュアルを手に入れたいと誰もが思います。こういう子どもの、このような困った状態にはこれをすればよいという個別の方法を知っていることは大変大切なことですが、それは本講習会の主な目的ではありません。本講習会では、こうした方法の元になるとらえ方ができれば、先生方が御自分のお力で子どもを理解し、子どもの状態に合わせて何をどう教えたらいかを導き出せると考え、その道筋を提案しようとするものです。

その道筋とは、事実を人間一般に重ね、その事実のわけを明らかにすることによって、適切な方法にいたる、というものです。そもそも専門性は、一般とかけ離れた特殊な知識や技能を指すのではなく、また狭い個人の経験の蓄積を言うのでもなく、知識をつなぐとともに、事実を一般と重ね、その間を上り下りできる能力、つまり筋を通して理解する力としてあり、それを身につければ適切な教育ができるというものだと考えます。それは、子どもたちが、重い障害を負い、あらゆる姿が特殊個別的であればあるほどに求められるたどり方ではないでしょうか。

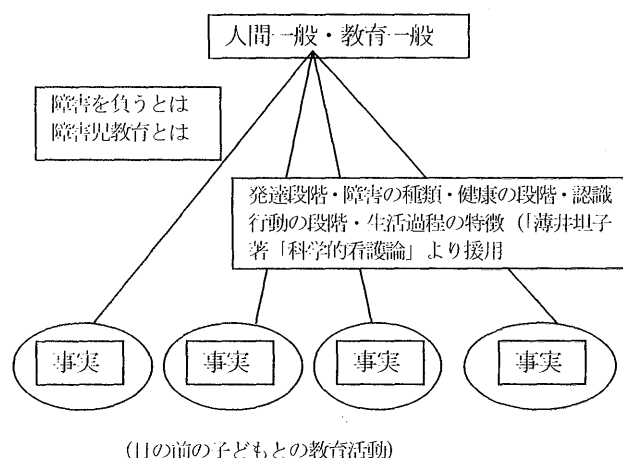
障害児教育のグローバル化の流れのなか、子どもと向かい合い、日々汗を流し、子どもの成長に一喜一憂しながら、その関わり合いの中で、共に成長を生きがいとし、かつ宝とする教育活動が不易としてあります。その不易の根拠を『人間一般』に求め、生きることの豊穡さを捉え返してみたいのです。この目的を実現するために、この講習会では、答えをだす形ではなく、道筋を提示し、一緒に考えてもらう形をとりました。もちろん、それを可能とする提案ができるのかどうかは、一切主催者側の責任です……（挨拶文より抜粋）」

ここにあるように、いきなり目立つ特殊・個別性に着目するのではなく、特殊・個別性を一般性からつないで位置づける大切さを提案した。内容については、平成18、19年度は既に昨年の紀要で述べているので重複を避け、ここでは割愛する。

〔第1回学習会〕平成19年11月23日、24日  
趣旨；

「障害の重い子どもたちにどのように教育を行なうのかについて、私たちは「人間一般・教育一般」を導きの糸にして、子どもを理解し指導していけば、きっと子どもの可能性が見えてくると考えているのです。それは、大昔大海原を航海するときに、船員が北極星を目安に自分の位置を定め、行く方向性を知ったように。一般論が目目の前の子どもとの教育活動を位置づけ、方向性を導いてくれると考えているのです。

それを簡単に図示すると次のようなものです。



さて、教育は児童生徒と教師の関係の過程ですから、教育の質は教師の状況判断能力と表現能力によって決まるといわれています。教育実践を積み重ねることで、経験的に教育する能力は高まっている皆さんですが、対象やその場の状況からどの事実を選択し、どう判断したのかという教育上の判断過程を人間一般から丹念にたどり、教育計画を立案する試みをしてみませんか。きっと、教育を展開する力をいっそう高める糸口を、ご自分で見つけることができると思います……（挨拶文より抜粋）」

と挨拶し、具体的な教育計画の立案と指導の仕方を身につけてもらおうとした。

内容については、

- ①人間や教育を元々から捉え返す思考法によって「障害を負うとはどういうことか」「障害児教育とは何か」を知った上で、障害の重い子どもの理解と指導の仕方をワークを通して学び合う。（一人の子どもの事実の提示をもとに、全体像の記述をし、自分だったらどう教育をおこなうのかの計画を立て、グループで話し合いを行い、その結果を発表する。その後、実際の対象把握と指導はどのように行なわれたのかを知り、自分たちが立てたものと比較し構造への入り方について「4つの見方、5つの柱」をもとに理解を深める。）
- ②「命を守る力を育てる指導」について、体の実体構造をもとにした対象理解と指導の仕方を、呼吸、摂食について学び合う。（模擬体験による立場の変換を行うことによって、適切な子ども理解と指導の仕方についての理解を深める。）
- ③「排泄指導」のもつ教育的な意義とその具体的な指導法について学び合う。（参加者より、各自の現場での「排泄指導の実際」をその問題点とともに話してもらいながら、話し合いを通して問題の共有と適切な理解と指導の糸口を見出す。）
- ④「コミュニケーション指導」における、児童生徒とのかかわり方について理解を深める。（模擬体験による立場の変換を行うことによって、子どもの表現の変化の気づき方、読み取り方を学ぶとともに、子どもが喜ぶ具体的なやりとりの仕方を学び合う。）
- ⑤「障害の重い子どもたちの教育において大切にすべき視点」について、スウェーデンの重度重複障害児教育の実践及びスウェーデン各地での現職教員研修の成果をとおして学ぶ。

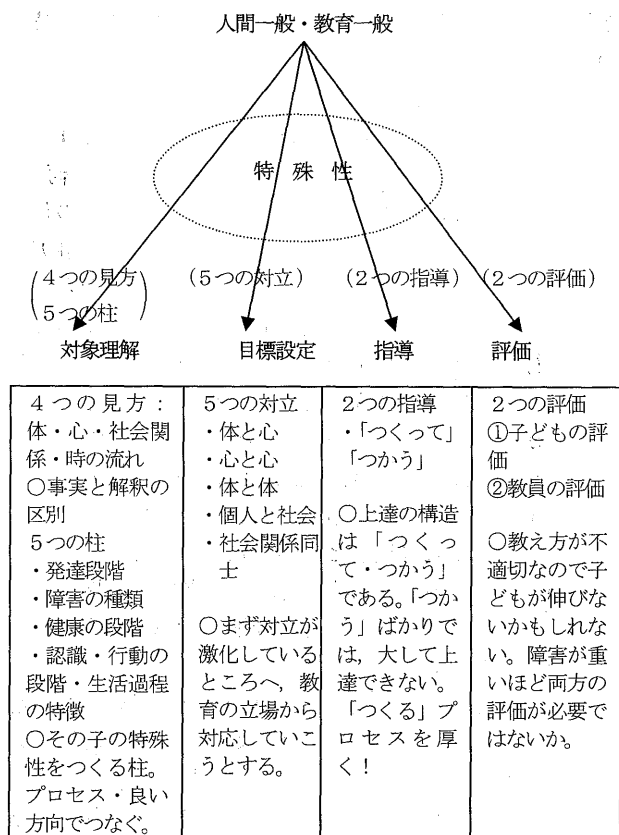
〔第2回学習会〕平成20年2月23日、24日  
趣旨；

「3回で一区切りとなる一連の学習会のなかで、まとめの会となります。今回は、講習会、第1回学習会で学んだことを適用して、良い方向へ向かった実践は共有財産にし、実践で困っている問題は参加者が討議をして解決し、それをとおして「構造に入った対象理解と指導の仕方」を更に深めようとするものです。

はじめに、今まで講師になっていただいた方々から、実際の指導場面のビデオを使って授業モデルを提示していただき、障害児教育で大切にすべき要点を理解する。

その後、北欧（スウェーデン、ノルウェー）の障害の重い子どもの教育の現状を知ることで、障害児教育で大切にされなくてはならない普遍性を捉え、事例を検討する際の基準の深まりを得る。

そのうえで、事例についての討議を行なってまいりたいと計画しています……（挨拶文より抜粋）」と挨拶し、



(薄井坦子著「科学的看護論」・南郷継正著「南郷継正全集第4巻より北嶋援用作成)

それぞれの実践の結果を報告し、話し合いながら学びを深めようとした。

内容については

- ①「障害の重い子どもの登校から下校まで」(1日の流れのデザインについて)
- ②指導過程を『人間一般・教育一般』から捉え返す試案の提示。
- ③「排泄指導の実際」(排泄指導の要点とは)
- ④「コミュニケーション指導の実際」(コミュニケーション指導の要点とは何か)
- ⑤「呼吸・摂食指導の実際」(「呼吸・摂食指導」の要点とは何か)
- ⑥「北欧(ノルウェー、スウェーデン)の障害児教育の現状を知る。」(国をこえて共通する教育の柱を、北欧の障害児教育と比較しながら捉える。スウェーデンで長年現職教員教育をされてきた石井教授とノルウェー・オスロ・オーセン教育センターで教鞭をとっておられるマユミ氏のディスカッションを通して知る。)
- ⑦ 事例の検討
  - A. 腹水が改善され、手の使い方が向上するにつれ、認識の著しい向上が見られた事例。-医療との連携の問題をかかえる-
  - B. 施設入所をし、視覚、聴覚、運動、知的障害を併せ持つ障害児が、触れる関わりを通してやりとりがひろがり笑顔が増えた事例。-手を自分から使わせ

ていくには-

- C. ふれる関わりを通して強い緊張が減り、呼吸や摂食動作が改善された事例。-排泄指導に課題を抱えている-
- D. 経管食、自力座位が難しく、知的障害も重度の児童に排泄指導をはじめたところ、改善が見られた事例。-授業時間と排泄指導の兼ね合いをどうするか-

これらの事例それぞれについて、現象の事実を「こころ」「からだ」「社会関係」に「時の流れ」を重ねた実態把握表に書いてもらい、それをもとに、参加者相互で意見を交換し合い、指導成果の確認と問題解決の方向性をさぐっていった。

こうして、希望者の熱意にこたえて行なった3回シリーズの講習会・学習会であったが、参加者には好評で、共通した以下のような感想を得ている。その2, 3を記せば、

「内容が、前回とつながっていること、ステップアップしていることがとてもいいです。単発の研修会も、毎回発見があつていいのですが、積み重ねていくこと、実践し検討していくことは、とても有効だと思います。顔見知りが増え、情報交換の場ともなります」「繰り返し学習することで、自分の中で整理ができ、目の前の子どもに起きていることを理解できるようになってきた。事例をまとめたことで、自分のかかわりを整理する良い機会になったとともに、話し合いを通して自分がやってきたことが間違っていなかったという自信につながったし、今後の指導の糸口も見つけることもできた」

などである。

#### 4. 排泄指導を通して分かる「人間一般」を把持する大切さ

平成19年度講習会・学習会の中で特徴的だったことの一つに、従来関心を持たれることが少なかった「排泄指導」がもたらす教育的意義の見直しがあつた。

それは、特に第1回学習会における排泄指導に関わる話し合いを通して参加者の共通理解となったものである。「排泄指導はお世話か? 教育か?」「排泄指導は、子どもの何を育てようとしているのか?」という問いかけに、参加者がそれぞれの学校の現状を話していくことによって理解が深まっていったのであるが、それとともに、中村が、障害の重い子どもの排泄指導を、人間一般・教育一般から捉え返し、事例とともに提案した内容は、多くの参加者のこころを揺り動かすものであつた。参加者の感想から2, 3紹介しておきたい。

「排泄指導についての認識が大きく変わりました。私が所属している所は病棟との関係も有り、指導をほとんど行っていません。今回の学習会で、トイレに

(つれて) いくだけでなく、『子どもたちのところをつくるための排泄指導ができるはずだ』と強く感じました。」「『排泄指導は、ところを育てることになるのだ』と感じました。入院している子だからと、あきらめてしまっていた部分がありましたが、最初から無理と決めつけてしまわずに、実践してみようと思っています。こちらの働きかけ次第で、まわりを変えていけるかも……と今は思っています。」「排泄指導をとおして、ところを育てているのだということを知ることができた。排泄に限らず、呼吸、食事、姿勢などすべてが、つい、そのみを目的と考えてしまいがちだが、そうではないということを知ることができたのは大きな収穫でした」

などである。

これについては、やがて中村の論文で詳細に説かれることになると思うが、前回「一般論をもとに現象を見つめ、構造に踏み込んでいく学問的捉え方は、大時代的なものとしてとらえる向きもあり、昨今の研究の主流ではないように思われる。しかし、実際に教育現場で適用してみると、教育上の有効な成果が出てくるのを事実で確認することは多い」と述べたことの実例ともなっているので、発表された際には、是非参照していただきたい。

(尚、この排泄指導の研究については、日本教育公務員弘済会より、平成20年度「日教弘本部研究奨励助成」をうけている。)

##### 5. 今後の研究と方向 (まとめにかえて)

今回は、私たちの研究の研究内容の柱の一つを担う現職教員教育のための講習会・学習会の新たな展開を簡単に紹介した。

現職教員講習会は毎回定員の2～3倍の申し込みがあるなかで行われている。これは、障害の重い子どもたちの指導に、なお多くの教員が困っており、適切な教育のあり方を模索し、指導を求めている一つの表れであると捉えている。

講習会・学習会では「日頃悩んでいた問題について、考えていくべき方向性が見えてきた」「学んだことを実践したいと強く思った。このような機会をもらえてとても幸せだった。今後も続けてもらえたら嬉しい」「自分の教育観の振り返りになった。定期的にこのような会があるといいと思います」などの感想が数多く寄せられており、今後もそのニーズに当校の一員として少しでも応えていかれるようグループとして努力をしていきたい。

また、検討対象となった事例については、発表の形式を定めた上で、今後事例集としてまとめていく予定である。

なお、事実と一般の上り下りをし、実践を位置づけていこうとするこのような学問的方法を、身につけた場合とそうでない場合との教育上の有効性を理論的に確認することについては今回は発表することができなかったが、

次回以降、順次論文にて展開していきたい。また、看護研究者と学問的方法論の有効性を確認する共同研究についても順次述べていきたい。

これらを通して、今後も「重度重複障害児の教育評価」という枠組みをもちながら、そこに新たな研究枠組みを重ね、障害児教育の実践的指導の体系化をめざす研究をさらに推し進めていきたい。(了)

##### <引用・参考文献>

- 立川 博著：「静的弛緩誘導法」 お茶の水書房  
 南郷継正著：「南郷継正全集第4巻」 現代社  
 薄井坦子著：「科学的看護論」「看護学原論講義」 現代社  
 瀬江千史著：「育児の認識学」 現代社  
 志垣 司：「学城第4号『障害児の科学的な実践理論を問う』」 現代社  
 看護科学研究会東日本支部平成15年度Aコースステップ  
 2 資料